

保育おおさか

平成15年11月1日 第339号

大阪府社会福祉協議会・保育部会
☎ 06-6762-9001 Fax 06-6768-2426

全国シンポジウム 今後の保育のあり方をさぐる

— 社会連帯による次世代育成支援に向けて —

マをもとに、いろいろな方々の発題や基調講演が行われ、今後の次世代育成支援策を左右する重要なシンポジウムとなった。

厚生労働省が主催する、「今後の保育のあり方」に関するシンポジウムが10月21日（火）、東京の日本教育会館で行われた。1部と2部に分かれ、一つのテーマ

まず第1部では、「利用者本位の保育サービスの提供を目指して」というテーマで、白梅学園短期大学学長の石井先生による基調講演が行われた。石井先生は、多様な保育サービスの求める家庭が増え、利用者中心の制度へ向かっていく中で、保育の質をしっかりと上げていくことが必要である。そのためにも第三者評価を受け、情報公開を行っていくことが保育の質の向上に繋がると提言された。

「連帯」と「共生」の社会へ

長猪又氏の三都市から事例発表が行われた。第2部の基調講演では、淑徳大学社会学部教授の柏女先生が15年8月に出された「次世代育成支援策のあり方に関する研究会報告書」について、それがまとめられた背景と解説をまじえ、「次世代育成支援策を高齢者関係施策と並ぶ国の基本政策として位置付ける」「子どもを産み育てることを社会がもっと評価する」

「社会連帯による子どもと子育て家庭の育成・自立支援」の3視点から、「すべての子育て家庭」を対象とした次世代育成支援策に転換して、その一般化・普遍化を図り、財源も含めて地域性、総合性を確保し、さらに地域の共助を推進することを基盤とし、ソーシャルワーク機能を確保することが基本的な方向であると話された。

この後、シンポジウムが行われ、次世代育成支援サービスはどうあるべきか、というポイントでは、子育てを外で行う場（つどいの広場、子育てサロンほか）をつくる必要がある、社会連帯へ向けて、育児文化を発信しなければならぬ。世代間の

続いて「待機児童解消に向けた取り組み」として、横浜市の子育て支援事業本部長の鈴木氏、神戸市児童福祉部保育課長の根来氏、仙台市の子ども家庭部待機児童ゼロ対策室

「社会連帯による子どもと子育て家庭の育成・自立支援」の3視点から、「すべての子育て家庭」を対象とした次世代育成支援策に転換して、その一般化・普遍化を図り、財源も含めて地域性、総合性を確保し、さらに地域の共助を推進することを基盤とし、ソーシャルワーク機能を確保することが基本的な方向であると話された。

関係が大事で、家庭の子育て力を、地域の三世代で育んでいこうという意見が出された。財源論では、社会保障給付金に占める高齢者関係給付費と、児童・家庭関係給付費の68.1%・3.5%というアンバランスを整えることが大事であるという意見が出された。

シンポジスト
厚生労働省少子化対策推進本部事務局次長 伊原 和人氏
東京家政大学 新澤 誠治氏
岩手県立大学社会福祉学部 鈴木眞理子氏
NPO法人びーのびーの理事長 奥山千鶴子氏

おわりに、「子どもを産まない、育てない社会」から「子育て、いのちを育むことが正当に評価

最後に柏女先生は、「変えるべきもの、変えてはいけないものをしっかりと考えていくことが大切である」と締めくくられた。



久々に雲一つない青空の朝、白い半分の残月がくつきりと見えた。子どもは口々に「あつ、お月さん」「へんやで白い月なんて」「朝やからやろ」と知ったかぶりの会話がはずむ。急に一人が大声で「あつ、ぶつかるー」みんなが見あげると飛行機が残月に近づいていった。一瞬息をのんで見ていると「あーよかったぶつからへんかったなあ」と皆真剣に見ていてその声に納得。そばで「あはやな、そんなもんぶつかる筈ないやろ」という保育者がいたら私は叱りたい。一緒になって「わあーすごかったな」と共鳴しながら機会を見てあたり前の話を伝えたいと思う。それから時々空を見ても月はみつからない。毎日「今日も白いお月さんないなあ」

子どもの表現は思いもよらないことが多く、最近の育ちの「ひずみ」が課題にされていることが多い。夢を持ち自然の営みにふれる機会を増やし、格好のよいことばかりや、まじめなことばかりと離れて、のんびり過ごしたいな。

(S・T)

「子育て支援」を振り返る

— 育児相談全体研修会を受講して —

育児相談全体研修会が10月6日（月）、指導センター5Fホールで行われた。

今年度の第1回目は、受講者を認定証取得者に限定せず、テーマを「子育て支援」を中心に、全職員を対象に行った。今回は、研修を受けた園長先生に、「子育て支援」について園長の立場で振り返っていただいた。

エンゼルプラン以降、子育て支援施策が次々と打ち出される中で、それぞれの園が多様な保育サービスを整備し、保育システムの構築に意欲的に取り組んできたが、子育て支援の本来の目的、趣旨は実際にどの程度浸透しているだろうか。

研修では、神戸親和女子大学教授の寺見先生ご自身が、8年間続けている子育て講座での実践をもとに、子育て支援事業を行う保育園において、その中核を担う保育士に求められる役割を、今一度原点に戻って考えようという内容であった。

支援事業とは、本来雑談のような気軽な相談や、親子に日常的な遊び場・交流の場を提供するものであつて、事業の遂行が優先され、その成果を参加人数で評価したり、数字に現れるものでもない。今回の研修を終えて、実際自分の保育園で行っているやり方が、地域のニーズにあつたものになっているか、事業を実施する

エンゼルプラン以降、子育て支援施策が次々と打ち出される中で、それぞれの園が多様な保育サービスを整備し、保育システムの構築に意欲的に取り組んできたが、子育て支援の本来の目的、趣旨は実際にどの程度浸透しているだろうか。

研修では、神戸親和女子大学教授の寺見先生ご自身が、8年間続けている子育て講座での実践をもとに、子育て支援事業を行う保育園において、その中核を担う保育士に求められる役割を、今一度原点に戻って考えようという内容であった。

支援事業とは、本来雑談のような気軽な相談や、親子に日常的な遊び場・交流の場を提供するものであつて、事業の遂行が優先され、その成果を参加人数で評価したり、数字に現れるものでもない。今回の研修を終えて、実際自分の保育園で行っているやり方が、地域のニーズにあつたものになっているか、事業を実施する

私の園では、「園庭解放（親子教室）」の募集に際し、幅広い利用者に呼びかけようと、町内会、図書館、保健センター、小児科医にお願いして参加者を募集している。また内容も、保育士がさまざまなメニューを考え、プログラムにも力を入れている。実際の参加者の大部分は、次年度入所希望者や、複数の親子教室に参加している人たちで、積極的に交流の輪を広げるケースが多く、そういった方々の園庭解放への評価は高いが、一部にはプログラムが負担であったり、居場所がない、雰囲気になじめない、予約が必要だと利用しにくい、と評価されるケースもある。

またプログラムの合間の面接相談や、育児指導、教室後のアンケートなども、回を重ねる毎に職員全員で検討し改善を図っているが、

地域の現状と現実の親子の姿から発想

求められる支援

求められる支援

地域の現状と現実の親子の姿から発想

親のホンネになかなか接することができないのが実感である。このように、現場において利用者全体のニーズを把握することは難しいが、園庭解放は親子で遊べる公園の少なくなった地域では、他の親子と出会える貴重な場であるし、また保育士が自然に子どもと接する姿から、親が「自ら」子どもへの関わり方、遊び方やしつけの仕方を学んでもらう、そういう場の提供としての重要な役割もある。これからも、親と一緒に試行錯誤を繰り返しながら、安心して参加できる雰囲気を作っていくしたい。ちょっと行ってみようと思わせる雰囲気、これがいずれ親のホンネを引き出し、長続きするポイントのような気がするからである。

またグループに入れない人をいかに溶け込んでもらうか、仲間作りをうながすきっかけになる言葉がけ、ここが保育士の力の見せどころになるかもしれない。保育士「お母さん、今日は〇〇君泣けへんかったわあ、エラかったで」

保護者「昨日、家で初めてボク保育園でガンバルって言うてくれてん」

保育士「よかったなあ、ホンマ、お母さんもようがらばったな」

園で何度となく繰り返される何げない言葉がけ、私は好きである。毎日が格闘である子育ての最中にある人は、どんなに自信満々に見えても何か心配事があり、なんとかそれを乗り越えている。保育士の言葉がけが勇気を与えるが、時には自信を奪うことにも繋がる。たとえ子育て支援と名を打って場を設けなくとも、日常的な相談や支援を真摯に行う保育士が増えれば、親が真に求めていることを掴むことができるはずである。

地域の実情にあつた支援とは、一律に上から決められるものではなく、地域の現状と現実の親子の姿から発想することが大切である。また児童虐待の発見においても日常保育への期待は高い。園は子育てのあらゆる面で、問題の未然予防ができる立場にあり、やはり専門性がなければできない仕事である。これからも子育て支援における保育士に課せられた使命は大きい。

（五風会保育園 土金新治）

保育士会『ひとつ』に



保育士国家資格化記念事業

保育士の国家資格化を記念し、10月28日(火)、門真市のなみはやドームで、保育士国家資格化記念事業「子どもたちの笑顔・元気な大阪」―私たちが、子どもの育ちを支えま―が開催された。

当日は、子どもたち・保育士・保護者を合わせ、約3000人が、



武内茂子保育士会長



太田房江大阪府知事

なみはやドームに集まった。まず、武内茂子全国保育士会会長・大阪府保育士会会長から、「すばらしい大阪・すばらしい日本になるよう大きな夢をもって、みんな一緒に頑張らしましょう」と主催者あいさつがあり、続いて、太田房江大阪府知事から、「子どもたちの輝かしい目を、そのままずっと持ち続けるために、保育

園・家庭・地域が手を携えてほしい。そして、保育士に対する期待と責任がますます膨らんでいる今、今後地域の中の保育園として頑張ってほしい」と激励の言葉をいただいた。

開会式終了後、保育士80人による組体操と、専門職としての自覚と社会への責任を示す「倫理綱領」の唱和が行われた。

その後、約2000人の子どもたちによる演技、ボン・パバルーン・旗が行われた。さすがに年長組の子どもたちは、笑顔でキビキビ元気いっぱい演技をみせてくれた。短い練習期間にも関わらず、子どもたちそして保育士たちの演技はすばらしく、本当に生き生きとした顔は印象的であった。また、会場内を

■前回は、笑いとともに「笑顔」が子育てにとって重要なものであり、それによって子どもたちに安心と自信と意欲が生まれるという話をしました。

次に子どもとのコミュニケーションで大切なことは、子どもの話を最後まで聞いてあげることです。

■最近の若者同士の会話を聞いていても「うん、うん」とうなずいたり、「さうだよね」とあいづちをうったりする代わりに「ウッソー」

としか思えません。また、われわれ大人との会話でも、何を聞いても「べつに…」とか「むかつく」とか「きもい」などと、まるで日本語になっていないコトバしか使えず、また、自分の意見を發表させても、話にメリハリもまとまりもなく、おまけに声が小さく、

しは心配でなりません。「話上手は聞き上手」ということわざがありますが、話上手になるには、聞き上手な聞き手が必要なのです。ですから、今の若者の貧しい会話能力は、子ども時代にシッカリと自分の話を、母親や先生に聞いてもらえなかったことの後遺症だと、

対しては、自分が受け入れられている、自分は大事にされていると実感できるはずですし、その人の指示に従うことに不満を感じないものです。

保育園で見ても、子どもが、わたしの言うことをきかない」と言っている文句を言っているお母さんたちの多くは、自分自身が子どもの話をチャント聞いていないような印象を受けるのですが……。

■ですから、保育に携わるわれわれは、もっと子どもたちの話に「うなずき」、「あいづち」を打ちながら、子どもたちの話を最後まで聞くように努力しなければならぬと、わたしは考えています。

落語医者の保育うだうだ話

「あいづち」と「うなずき」

そのために、子どもの話に「あいづち」を打ってあげる、あるいは声に出さなくても「うなずき」をタイミングよく返してあげることも大切で、それが、子どもたちの感情を豊かにし、言語能力も高め、その上、子どもの信頼感と安定感を育てるのです。

とか「マジ？」などと、まるで人の話を茶化しているようなコトバが氾濫しています。

このようなコトバを使うこと自体が、自分たちの心の貧しさ、言語能力の低さ、あるいは他人を受け入れようとしないう心性を表している

われわれをイライラさせる「話ベタ」が増えています。これからは、自分の意見や信条をシッカリと他人に伝えられなければ社会生活を送ることができない時代になると思いますが、こんな「話ベタ」の若者の将来はどうなるのか、わた

わたしは信じています。■それに、なにより大人も子どもでも、自分の話を最後まで聞いてくれない人を好きになったり、信頼することは難しいことではありませんか。

逆に言えば、自分の話を最後まで聞いてくれる人に

「楽しかった」「いい思い出になった」という言葉もたくさん聞くことができ、この記念事業を通し、保育士の存在を大きく社会へアピールし、保育士会が「ひとつ」となった。

色どったたくさんのペンント(写真)も、一枚ずつ子どもたちが描いたもの。閉会あいさつの後、全国保育士会の歌「私たちがいるんです」を合唱し、記念事業は終了した。



